たたかってよかった

沖電気指名解雇撤回闘争の記録

藤田庄市＋森住 卓〔写真集〕

たたかってよかった

藤田庄市＋森住 卓〔写真集〕

沖電気指名解雇撤回闘争の記録

藤田庄市＋森住 卓〔写真集〕

たたかってよかった

沖電気指名解雇撤回闘争の記録

日本電波ニュース社

ただただ

勝利！胸につきあげる熱いもの
発刊によせて

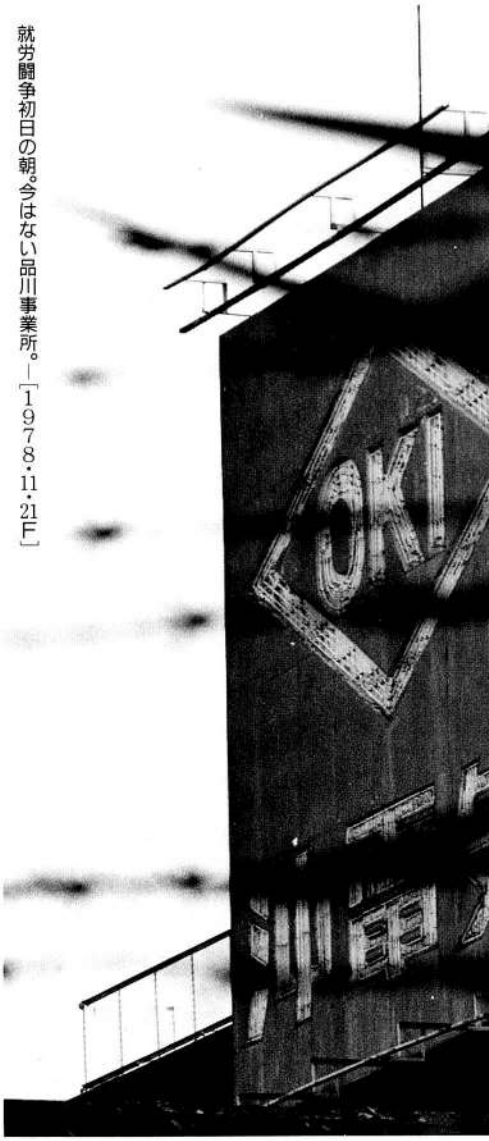
山口勇子
児童文学者

沖電気争議団の和解成立、このニュースを知ったのは、じつは海外でした。たまたまウィーンで平和の対話集会があり、日本原水協からわたしも出席していました。そのとき、日本に打ち合わせの長距離電話をかけた代表団の一人から、沖電気争議が勝利解決したということだ、ときいたのです。その瞬間、胸につきあげる熱いものがありました。

会議でわたしたち日本代表団は、核戦争阻止、核兵器廃絶を緊急の課題として世界の人びとが第一義的に、しっかりうけとめるように、そして反核国際統一戦線の結成へと、大きく歩み出すことを訴えました。その最中に舞い込んだこのホットニュースに、どれだけ励まされたことでしょう。みごとな団結に貫かれた八年間のたたかいは、日本の労働者が世界に示した、一つの積極的な典型として、語り伝えられることと思います。

わたしが沖電気の仲間を支援する会に加わったのは、たしか七九年八月からであったと思いますが、とりたてて何のお手伝いもできず、その点は心苦しいのです。

しかも反対に、毎月送られてくる機関紙「はた



就労闘争初日の朝。今はない品川事業所。―［1978・11・21F］

らく」からは、どれほどたくさんのことを吸収したかしれません。

年月と共に争議団の子どもたちも成長し、小学校入学の写真も相次ぐようになりました。すると「はたらく」の中の子どもの作文が楽しみになりました。

八四年十一月、横田基地に〝核トマホークくるな〟と人間の鎖行動をしたとき、わたしも参加しましたが、争議団の子どももお父さんと参加して、手記を書いていました。米軍基地の広さにおどろき、デモ隊を分断する多数の警官に怒り、「力を合わせれば何でもできる」と、結んでいます。それは父母たちのたたかいを日夜みていて学んだことが、大デモ行進と重なったときに生まれた、子どもながらの決意だと受けとめました。

また、父母たちの首をきった会社に対して、「今までのことを、一同の前でどげざしてあやまってください」と書いています。正々堂々の鋭い指摘です。

伊藤善正さんのたたかい半ばの死は、ことばにつくせぬ無念さですが、こうしていま和解を勝ちとれたのです。

この度、藤田庄市・森住卓両氏の撮影による写真集「たたかってよかった」が発行されることになりました。三〇三三日のみなさん方の苦悩と力強さが、一枚一枚の写真からも伝わってきます。

今後、争議団全員が、会社の内と外で、これまでにも増して心を合わせ、どんな困難にも打ち勝って行かれることを信じています。八年間の闘争で、より一層人間らしい魅力を得られたみなさんの、これからの活動を期待せずにはいられません。

一九八七年五月

まさか!!

「指名解雇」強行!! 一九七八年 十一月二十日 一九六〇年の「三井三池炭鉱」の大争議以降、
大企業では、「死語」と化していた「指名解雇」が 通信機大手メーカーの一つ
沖電気工業(本社、東京港区。一万四千人。資本金一六七億円=当時)で強行された。
テレビ、新聞などは、「ある日突然—あなたは、もういらないと、言われたら…」と、大きく報道した。

金子輝人さんは、指名解雇から二週間後に結婚式をひかえていた。―［1978・11・21F］

夫婦とも指名解雇された松本和子さんは、
昼の本社前抗議行動のとき、マイクで訴えたあと、
泣き出してしまった。　1978・11・21F

「沖電気の指名解雇を撤回させる会」の結成会。（1978・11・21F）

がんばれば必らず道は開ける

中山森夫
沖電気争議団代表

「三十五人の職場復帰。残る三十六人は円満退職する」

一九八七年三月十三日沖電気との間で和解協定が成立した。指名解雇を撤回させ、半数を大企業職場に復帰させるという画期的勝利を勝ちとった。喜びが八年余の苦労をゆっくりといやす。ある人は「首になったあと田舎に帰ったら、おふくろが家中の窓を閉めて、お前は外に出るなと言われた」と語るし、またある人は「俺の田舎では今までずっと沖電気に勤めていたことになっていた」と話した。勝ったから口に出せる話である。切られた痛みを八年余、みんな持続させてきた。

身勝手な首切り

一九七八年十月三十一日。沖電気(本社・東京、一万三千人)は二百八十六人に対して指名解雇を通告した。人員整理を提案し、わずか二十日間で従業員の一割近い千人以上を退職に追い込

んだ上での暴挙であった。翌日の各紙は「三井三池以来の死語となっていた指名解雇の復活」と報じた。会社は「経営危機」「剰員」を理由としたが、翌七九年には史上最高、約百億円の利益をあげ、毎年五百人以上の新卒者を採用した。経営危機の回避ではなく、もうけを上げるための身勝手な首切りであった。「情報化社会」の到来を迎えて、通信機メーカーから、情報機器の総合メーカーへ飛躍するための、体力強化策として指名解雇が強行された。低成長へ移行する時代に、急成長を約束された企業での指名解雇攻撃は、労働者、労働組合の対応如何によっては波及する危険性の大きい攻撃であった。

黙って引き下がれるか

闘いは、極めて困難なところから出発した。当該労組である沖電気労組はこの解雇撤回闘争を組織せず、被解雇者は組合員権喪失の扱いを受けた。

会社からも、組合からも、放り出され、茫然自失のところから闘いは始まった。夫婦で切られたもの三組。妊娠中の女性三人。最年長の伊藤善正さんは五十八歳で二年後には定年となり、「長い間ごくろうさまでした」と送り出される筈であった。最年少の桧垣君は四国から上京して四

仮の就労闘争のあと、争議団の事務所として使った部屋を下見した。（1978・11・21）

本社前。［1979・3・20F］

指名解雇直後の就労闘争。〔1978・12・19〕

年、さあこれからという時の突然の解雇であった。展望などわかる筈もなかったが「こんなひどい首切りをされて黙って引き下がれるか」という怒りが一人ひとりに闘う道を選ばせた。

他人ごとではない

の職場からは、争議支援を旗印に、長時間残業反対など職場要求も持ちよって企業のワクを越えた連帯がつくられた。

しかし、裁判所での和解にむけて、沖電気は頑強に職場復帰を拒否しつづけた。沖電気城下町である本庄市で八千五百人の仲間が結集してふれ

労働組合を一軒一軒訪ねて、支援のお願いをした。沖電気を上廻る大きな力を、と全国を駆けまわった。支援労組七千団体。沖電気に争議解決を要求する個人署名は五十万を超えた。行商の花火やカレンダーを買ってくれた人は延二百万人に達した。

「沖電気の指名解雇許すな」という訴えは、広汎な労働者に他人ごとではない切実さを持って迫った。資本によって分断され、屈服を強いられつづける労働組合運動のなかで、統一と闘いを求める職場労働者の熱い連帯の輪がつくり出されたのである。

「すさまじい闘いに…」

草の根からの支援の広がりを基礎に一九八二年闘う労働組合が「指名解雇反対」の一点で団結し、中央共闘会議が結成された。闘いはここから攻めの段階に入った。背景金融資本である富士銀行に対して、全国の支店を一斉に攻め上げた。「情報化」を推進する通産省に対して、大企業本位の補助金行政批判と合わせて、争議の解決努力の申入れを行った。富士銀行をして「すさまじい闘いになって来た」と言わせる闘いに発展した。

沖電気の職場からは争議支援を理由とした仕事差別の撤回を求める闘いが開始され、電機あいまつりを成功させ、足もとから会社をゆさぶり、都内四カ所と三多摩では千人以上の大集会をわずか一カ月間に連続して成功させた。仲間の心を一つにした闘いが、ついに沖電気に職場復帰を決断させることになった。この終盤の攻防は、労働者の最大の武器は団結であること、統一した大衆闘争なしには如何なる譲歩も資本から引き出しえないということを改めて示したものと言えるであろう。

新たな出発

沖電気闘争の勝利は、現在円高、産業構造調整を口実に果てしない攻撃を労働者、国民に加えている大企業の横暴なやり方に対して鋭い反撃となった。同時に、その攻撃に職場で闘いつづけている仲間を限りなくはげますものになったことと確信する。一人一人の要求を大切にして、その要求実現のために大きな団結をつくり上げて来た沖電気争議の教訓は、国鉄労働者をはじめ、闘うすべての仲間の闘いにつながるものである。

皆さんのご支援で、三十五人は沖電気の職場で、また退職する三十五人は新らたな道に向けてそれぞれの出発をする。「がんばれば必ず道は開ける」を八年余の財産として。

拒絶

就労させろ！「争議団が撤くビラは取るな、口も聞くな…」
沖電気は、従業員が、たたかいを支援することを恐れて、
テレビカメラでの監視も始めた。

「指名解雇は、やりすぎ…。いつか、職場に戻ってきてね」と、
ひそかに応援をしてくれる多数の沖電気労働者を、
心の糧に、「就労させろ！」の行動から、
七十一人は闘いを初めた。

本社前。―［1978・11M］

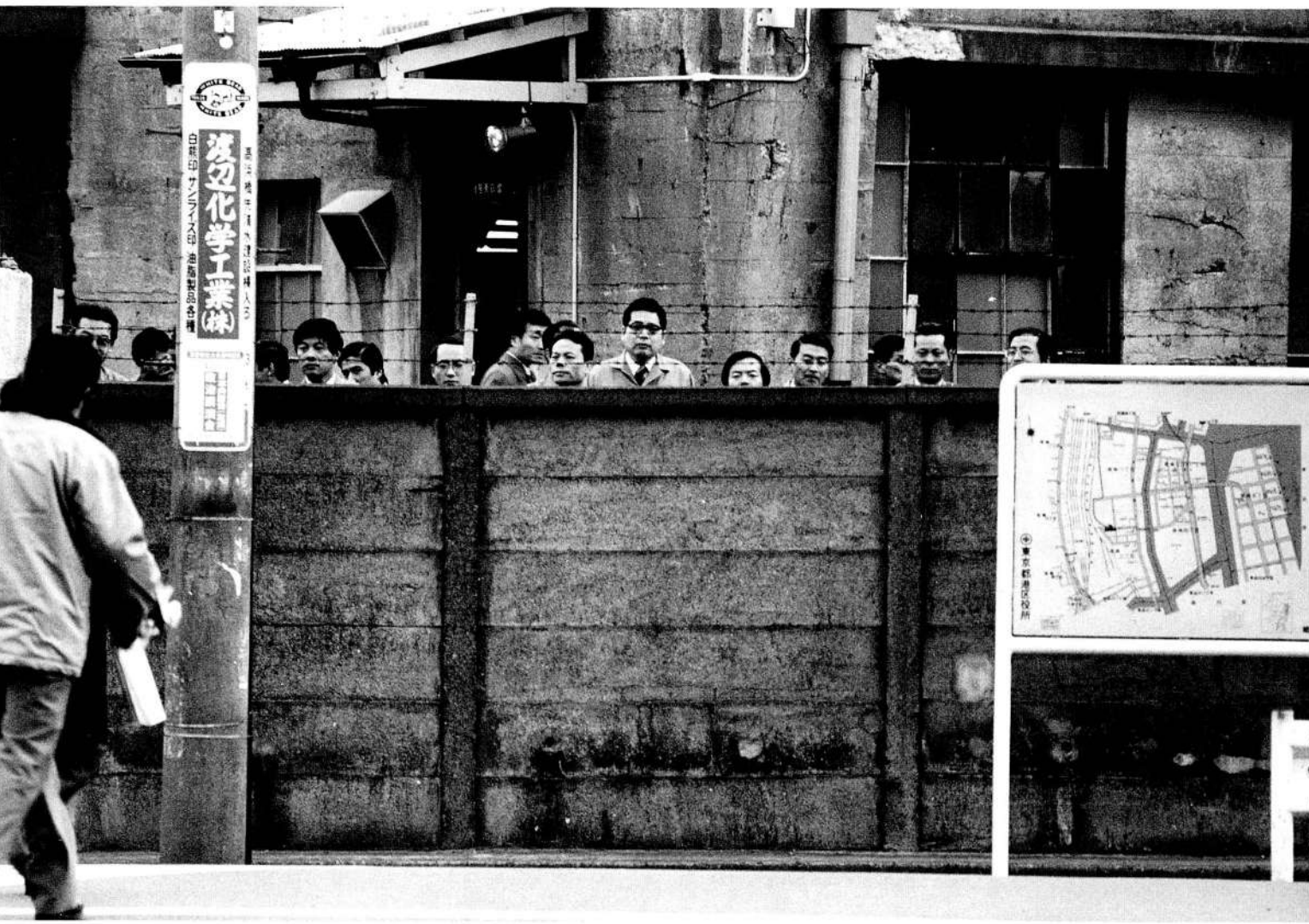
本社前。―［1978・11M］

八王子工場。屋上からカメラが見え隠れしていた。―［1979・9・17F］

品川工場前。―［1978・11M］

本社前。[1979.1.4 M]

品川工場。
門前での就労闘争のあと、
塀の内側からは職場の
労働者がよく見ていた。
―［1978・12・15F］



本社前。[1978・1・21E]

八王子工場前。［1979・9M］

従業員以外の方は
写真撮影禁止
場できません

許すまじ

「沖電気争議団です」

「労働を奪われし手にて行商の荷をさばきゆく君の青春」

闘いのバロメータは、財政確立にあり…。

沖電気争議団員は、北海道から沖縄まで、全国で、物品販売(行商)や、募金を訴えた。

最初の頃は、野宿をしたりと、苦労を重ねた。「がんばってね」…その一言で、元気をとりもどす。

熱い涙を流しながら、「沖電気争議団です」と歩いた。

工場の門前宣伝に出発。―［1979・4・27F］

沖電気の行商はたたかいを広げ支える上で大きな力となった。―ピーナッツ行商―［1984・12M］

一人めの子供を出産したあと、元気にビラをまく相原勝美。―［1979・9F］

地図と睨っにらめっこ。—
[1979・6・20F]

オズオズと入って
ゆくさまは、
いつまでも続いた。
［1981・3・18F］

争議の初期、川口義範さんは
自分の車に品物を
積んでまわった。
［1979・6・20F］

国労にオルグにゆく
市川美佐子さん。
東京・品川駅近くで。
［1981・3・18F］

支援する会の会員(左)が
休暇をとって
オルグ活動に加わった。
［1981・3・19F］

訪ね歩いて…。―
［1979・5F］

労組オルグに出発。―
［1979・9M］

東京の晴海埠頭で、港湾労働者に訴える。―［1981・10・12F］

休みをねらい援を訴える。―端、高崎支部の井明さん―
〔1980・2・14F〕

行商の品物を保育園の労働組合に納めゆく。景山政行さん（左端）と藤原正和さん（左から二人目）。
〔1979・12・18F〕

行商の荷物は重い。バスのゆれが眠けを誘う。―［1979・5F］

都内の労組まわりのなかで…。—
[1979・9M]

カンバの訴え。―品川工場前。［1979・9・26F］

もう出てくるころ。帰宅する職場の労働者にビラをわたそうと
まちかまえる佐々木君代さん。本庄事業所で。［1980・2・1F］

バイクを利用してビラ折り。―
［1979・9F］

平井盛博さんは、
愛用のバイクで
東京・東部地域をまわった。—
［1979・9F］

岡山市の木下さんは家族ぐるみで支援をした。中国地方オルグ団は必ずこの家にお世話になった。―［1984・5M］

全国オルグ・中国地方班の出発（事務所前で）。―
［1984・5M］

岡山市の木下さん宅で…。―
［1984・5M］

子どもが小さいうちは連れ歩くことが多かった。中村光子さん。 1979・9・26F

お父さんが首を切られた後に新入社員を入れるとゆうことはひどいと思います。
新入社員の方がお父さんたちより若くて、せいせきがあさいのにお父さんたちより新入社員をえらんだ会社がわをうらみたい気持です。
お父さんたちが首を切られたとき、私は、保育園の時でよくわからないけど、
お父さんやお母さんの気持はどんなだったのか　首を切られる方の気持を、もっと、考えてほしいです。

北村やすほ

うちの父は、首をきられました。
父は、ほんとは、よいことをしたのです。ただ、会社では、みとめられなかっただけです。
だけど世間では、みとめられています。
首をきられたあとから、新しい社員を
その会社では入れました。
なぜ、うちの父では、いけないのでしょうか？
なぜ、首をしてから、社員を入れたのでしょうか
私は、今しあわせです。それは、父が首になっても、私たちのために、がんばってくれるからです。首をきってでも
家族のために働いているのです
一日も早く、社員にもどして下さい
そして今までのことは、あやまって下さい
それも、沖電気一同の前で、どげざして
あやまって下さい。
父がゆるしても、私がゆるしません！
沖電気の人々がんばって下さい。

北村ともみ

ぼくのおかあさん　かつのけんー

ぼくがまえにかぶっていたぼうしがなくなったのであたらしいぼうしをかってとたのんだ。てたらい年の夏にかおうかと いいました。そしたらぼくはやたといって なんどかたのんだ。とうがないかってあげるといいました。だけでなん日もかってくれません。なんどかぼうしかってきたとききました。きょうは、いってしかったからかえなかったといいました。ぼくはあたかってきてもらったのんだ。おかあさんは あさはやくて夜もおそいのでたいへんだと思う。ぼくはいうことをかってきてもらった日　ぼくはうれしくていスの中でかぶっていました。ぼくのおかあさんはぜんぜんせがちいさくて　かみのけがもじゃもじゃです。でもそういうおかあさんがすきです。

わたしのお母さん　米田さわ子

わたしのお母さんは、会社で、はたらいてはいません。だって、前は、ちゃんとはたらいていたのに、おい出されてしまったからです。でも、毎日、てっかいさせる会というところで、"そんなことは、ゆるせない"と、がんばっています。ときどき夜おそく10時すぎぐらいに帰ってくるときがあります。わたしは、たいへんだなーと思ことが、なんとか、ありました。一っしょにいることだってこのごろはすくなくなってきました。ほとんど、おとなりで、いるときが多くて、さびしくなります。お母さんが帰って来ると、「あーあつかれた」と　言います。こんないそがしい毎日の中で風でもひいたら、もっといそがしくなってしまいます。だから風だけは、ひかないようにと思っています。わたしが、風になったら、それこそ、わたしのために　休まなければなりません。だから、毎日、外で、元気よく、あそんでいます。おかあさんがんばってね。

うちのお母さんは、だいたいいつも朝の9時から夕がたの6時ぐらいまではたらいています。びらまきとかがある日は朝の6時45分ぐらいにおきて7時15分ぐらいにうちをでます。びらまきは、やったことがあるけどつかれました。

かいぎとかさいばんがある日はよるぼくたちがねたころにかえってきます。うちでは、せんたくをしたりふとんをほしたりいろいろな仕事をしています。朝からよるまでいっぱいしごとをするのでよるねるときは、つかれているからしゃべらないでといいます。

朝からよるまで三十っこぐらいのしごとをやるのでほんとうにつかれているんだとおもいます。

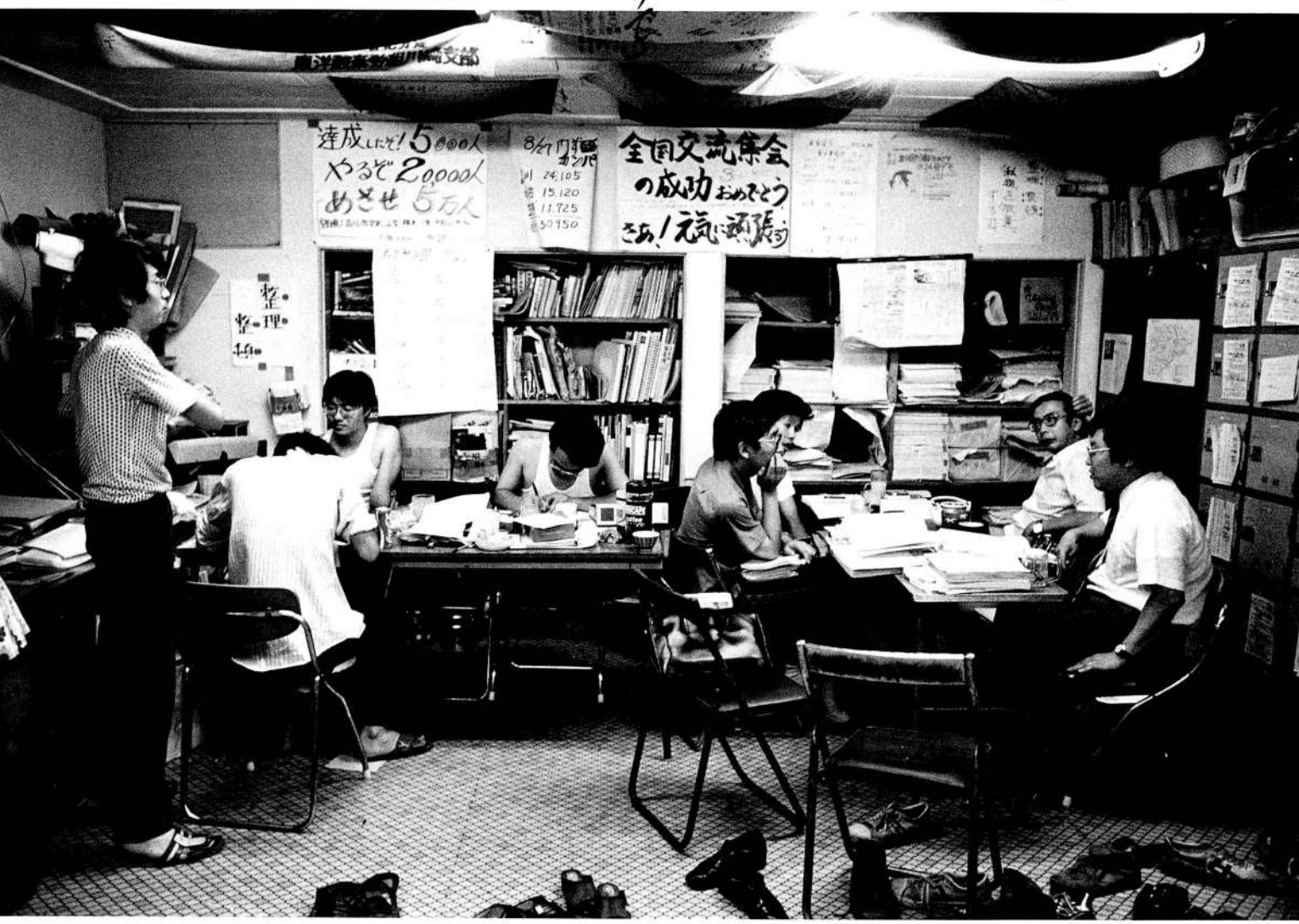
まつもとゆたか

＝事務所＝

二十四時間営業中
東京・港区三田三―一一―一〇。静かな住宅街。
トントンと鉄の
階段を昇る民家の
二階が沖電気争議団
の本部事務所。
みそ汁やカレーの

砦（とりで）

においもする
アットホームな雰囲気。
ここでは、
なぐり合いもあったし、
徹夜の激論もあった。
また全国の人びと
からの激励の手紙や
電話に涙する
場所でもあった。



争議団事務所。闘いの砦。―［1979・9F］

[1978・12・12M]

松本和子さんは夫とともに解雇された。―争議団事務所にて―［1984・9M］

床にすわりこんで苦情？松本謙司さん。［1979・5F］

印刷物は争議団と支援の人々を結ぶ動脈。―［1979・9F］

「よろしく〜」。斉藤洋子さん。―［1979・9F］

支援要請先へ「これから参ります…」渡辺秀雄さん

争議団事務所にコンピューターが導入された。―［1984・2M］

争議団事務所で…［1979・9M］

ラーメンのつくり方もうまくなった。[1978・12・15E]

生きる

「…ぼくがまんできるよ…」

沖電気の指名解雇には、妊娠中の婦人三人、夫婦とも解雇三組(東田・相原・松本)がふくまれていた。非道な解雇は、四十人をこえる子どもたちの心にも影をおとした。ある母親の証言。

「おもちゃ屋さんの前なんかで、おかねないんでしょ、ぼくがまんできるよ。買うとごはん食べれなくなるもんね、と子どもが言うんです…」

解雇直後は目立たなかったお腹も…。相原さんと東田さん。[1979・2・16F]

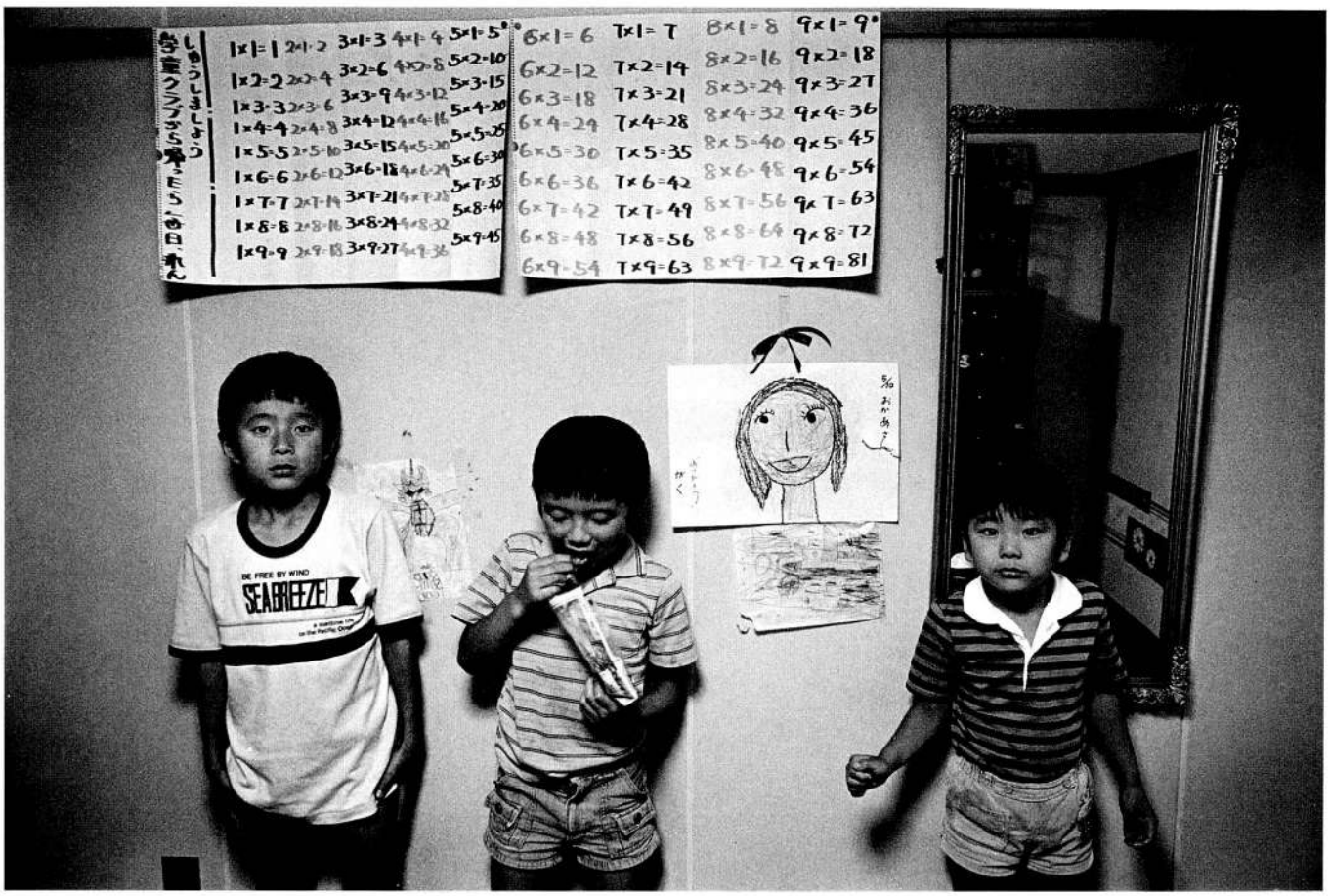
東田稔さんと恕子さんは
夫婦とも解雇された。
八年四ヵ月後。二男の慎吾君
(小学校四年生=解決時)は作文に書いている。
「…お父さんとお母さんが働けるように
なったので、夏休みに家族で
沖縄のおじいちゃんの家に遊びにゆきます。
その時はいっぱい写真をとり、いっぱい海でおよぎたい…。」
長男の利比呂君は中学一年、三男の学君は小学校二年になった。
夫婦は六月末、そろって高崎工場へ復帰する。

照子さんがおそくなるので、
今日は稔さんが夕食の準備。
［1979・9・11F］

四人での夕食。(手前の一人分はカメラマンの分です。念のため)―[1979・9・11F]

品川工場前。1984・2・26M

建築計画のお知らせ
建築物の名称
建築物の所在地
建築主
設計者
施工者
標識設置年月日



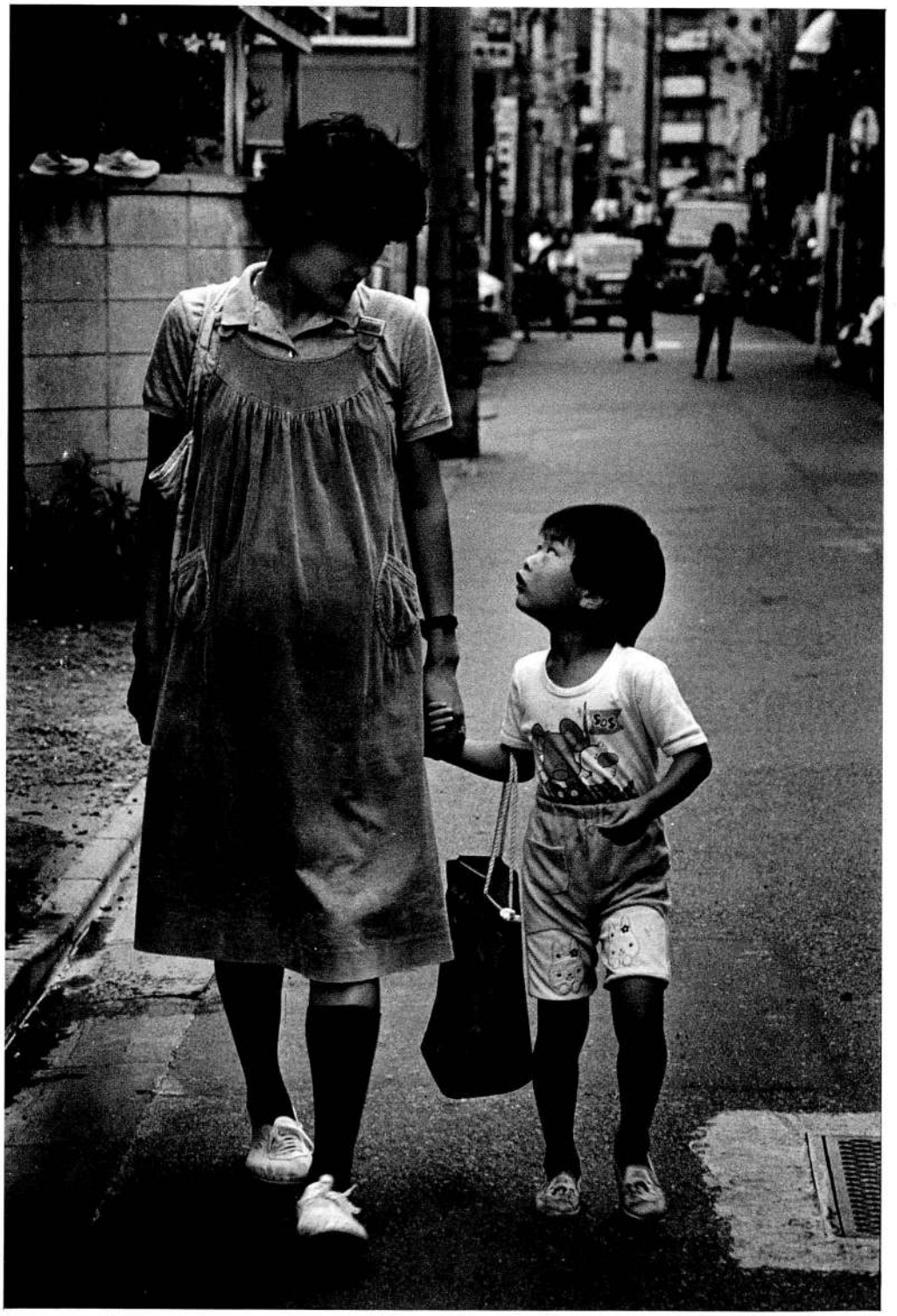
長男利比呂（としひろ）くん、次男慎吾くん、三男学くん。―［1984・6M］

沖電気芝浦包囲デモ。―
［1984・4・6M］

相原夫妻の長女、香利（かおり）。
生まれて3ヵ月のころ。—
［1979・7・31F］

相原幸男・勝美夫婦も、
ともに解雇された。
妻勝美さんのお腹には
新しい命が宿っていた。
夫婦は、いつもたくさんの人々の
あたたかさに感動しながら、
争議中に生れた二人の子と
ともに生き、闘いぬいた。
幸男さんは本庄工場へ復帰、
勝美さんは退職する。

争議団事務所で。［1983・6M］



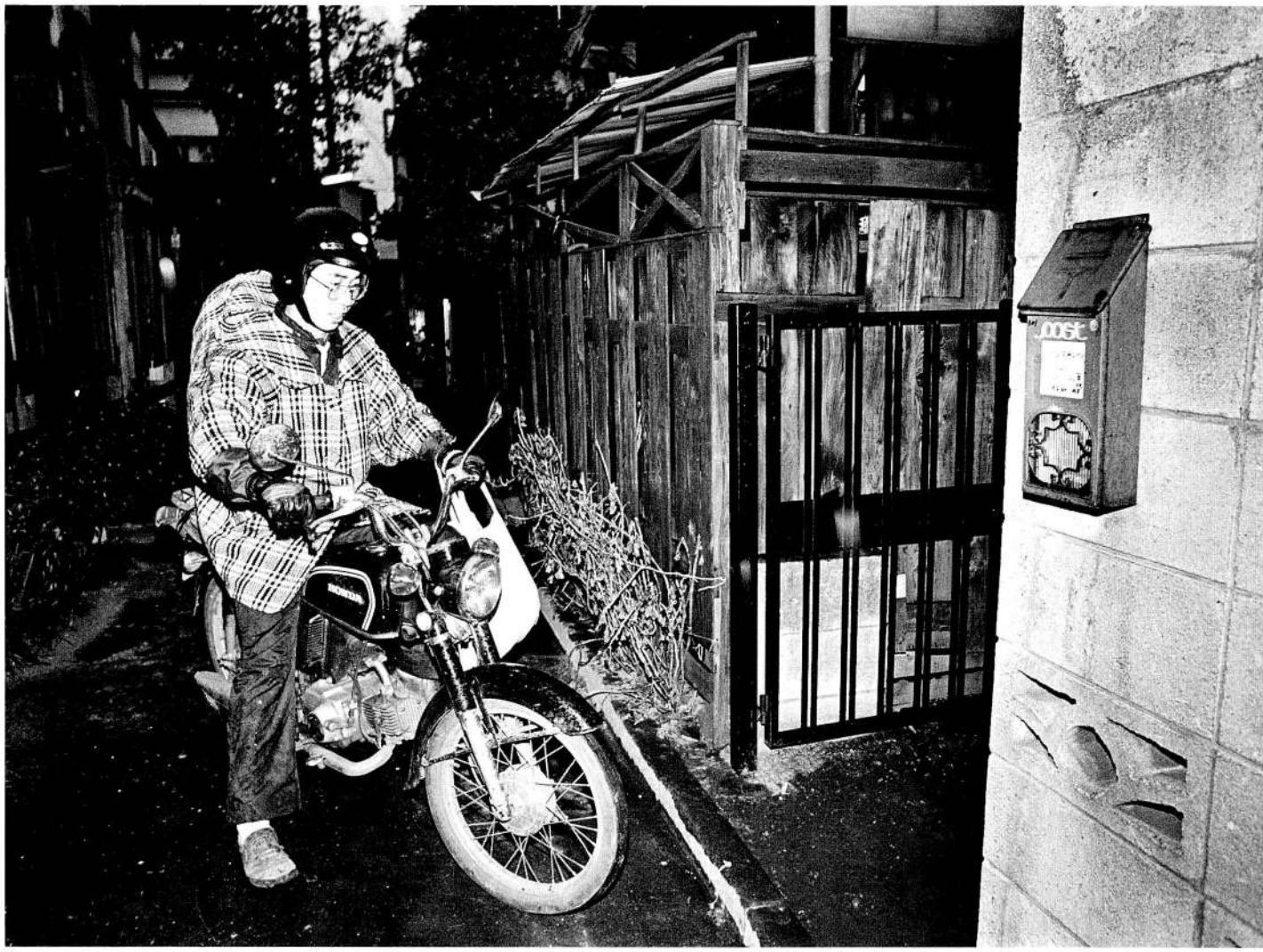
長女香利ちゃんのお迎え。勝美さんのお腹には二人目の子が。―［1983・6M］

長女が生まれて、
新しいアパートにうつった。―
［1979・10・27F］

「さあ、保育園へ――。」［1981・3・18F］

朝の保育園は夫の幸雄さんの役割だ。―
［1984・2M］

保育園へ…。
［1984・2M］



保育園から帰る。―
［1984・3・3M］

自宅で…。―[1983・6M]

二人の子供は争議の中で 生まれ成長した。―［1984・3・3M］

休日。多摩川へお花見に出かけた中山一家。
長女の友だちも加わって。［1979・4・7F］

新婚間もないころの金子夫妻。―［1978・12・15F］

狭いながらも…。階段も肩すりよせて。［1978・12・15F］

八王子工場で職場結婚をした鹿角さんは、妻だけ解雇された。自宅で［1984・12M］

集会会場の隅で。［1979・3・6F］

板垣てつ子さんの一家は、長女が小学校への入学を迎えた。夫（沖電気勤務）は、職場で支援をつづけた。［1981・3・18F］

わらび座での集会には
母親たちも招待された。
［1979・8・1F］

八島崇好さんは指名解雇後はじめて母親と会った。―秋田・わらび座にて。―［1979・8・1F］

ヤング・パワー

争議、わが青春 解雇された時の、平均年齢は、二十九歳。若い団員は、たたかいをひろめ、前進させる原動力。とくに十人をこえた独身者の結婚ラッシュは見事だった。沖電気独身寮を拠点にしつづけた、不屈さ。そして、バンドまでつくって宣伝する、楽天的青年群像。

東京・蒲田駅前。―［1978・11M］

やるすな!
沖電気の首切り
沖電気の不当解雇を撤回させる
やるすな!
沖電気の首切り
沖電気の不当解雇を撤回させる

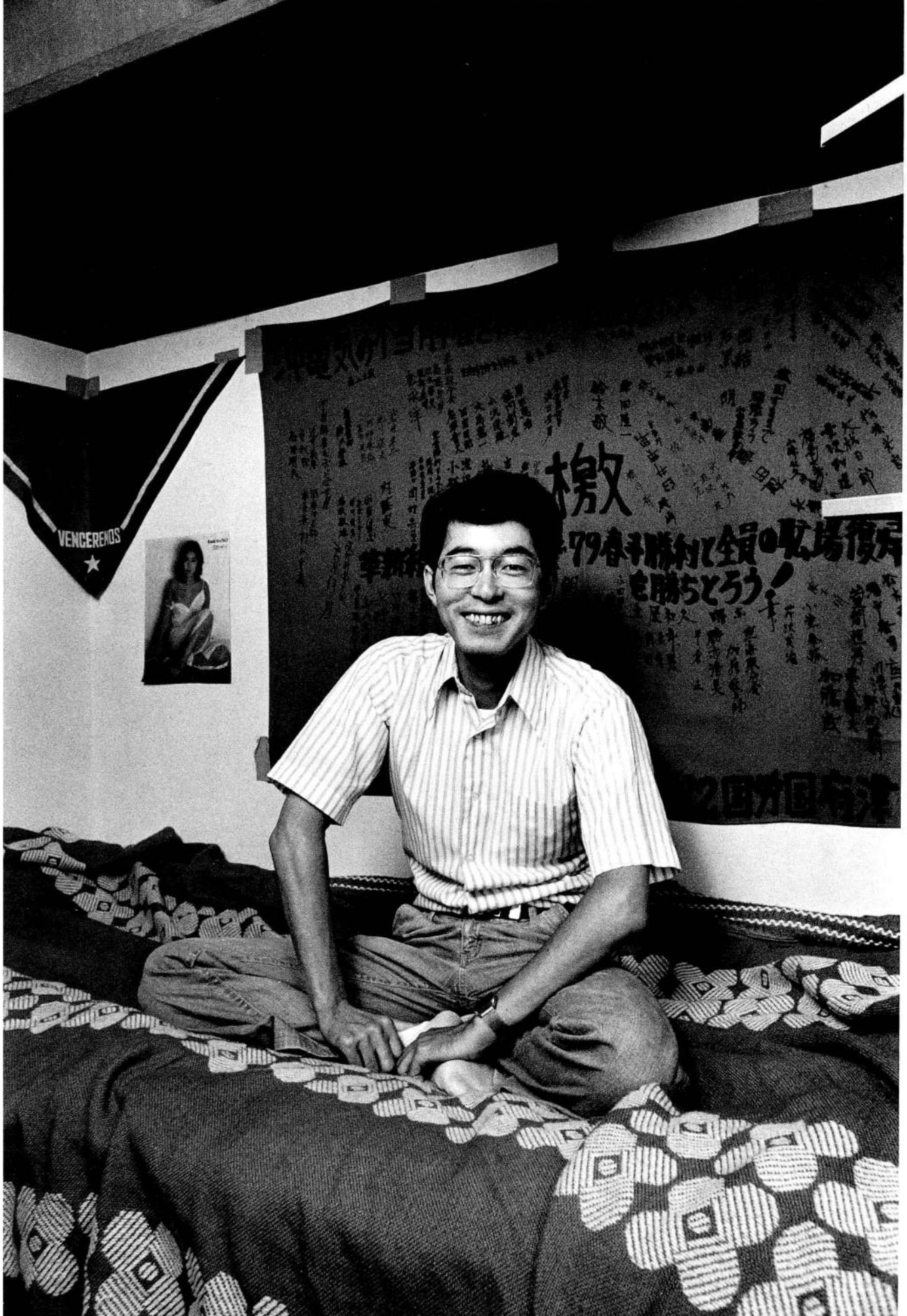
スモン訴訟のたたかいにも参加。―［1979・9F］

自宅ではなく、争議団の事務所。
コーヒーに音楽?―
［1978・12・15 M］

本社前での抗議行動。―［1978・11M］

寮の地下室がこぶしバンドの練習場。［1979・9F］

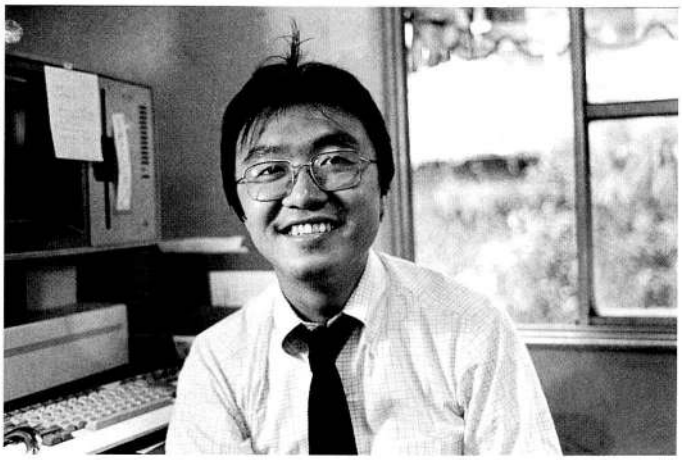
沖電気蕨寮（埼玉県）：「解雇者は寮から出ていけと電気もガスも止められたが！」［1978・12M］



寮の自室でこの日はたしかフテ寝していたはず…。―［1979・9F］

自室にろう城。
寮からの追い出しに抵抗。―
［1979・2・13F］

横浜の青葉台寮、
八人の"居すわり軍団"。―［1979・9F］



八島崇好さん。
「はたらく」（支援する会ニュース）に
こぶしくんを連載しつづけた。―
［1984・9M］

交流会がおこなわれた
わらび座で。―［1979・8・1F］

解雇されて最初の日曜日に
結婚した金子輝人さん。―
［1978・11・26M］

結婚式間近の真喜志晃さんと
ふくみさん。ふくみさんは
沖電気に勤務を
つづけながら支援した。―
［1979・8・1F］

屋代真さんの結婚式。―［1981・10・11F］

屋代真者♥

″人間の誇り″を感じながら

藤田庄市

初冬の寒気が身にしみた。

就労闘争の開始日、一九七八年十一月二十一日。指名解雇に服すまいとする人々と行動を共にした。解雇されるいわれのないことを必死で訴えるのを聞き、彼らが、「人間の大切なものを失うまいとしているな」と幾度か思った。

駆け出しカメラマンのころから労働運動の取材には、比較的かかわってきたほうだ。七〇年代初期、三十パーセントをこえる賃上げ率を獲得した時の春闘の熱気も知っている。ところが、「石油パニック」から経済の「低成長」の時代になるや、呆気にとられるほど労働運動は精彩をなくしていった。同時に、各地で人員整理の声が聞こえだした。あの熱気はどこへやら、例外はあっても、労働側はやられっ放しである。

沖電気の指名解雇撤回闘争の開始は、そんな時代の流れを感じていたなかでのことだった。沖電気の問題は先端技術を扱う大企業のことであり、三井三池以来の大量指名解雇、規模も大きかった。腰をすえて取材しよう、寒気のなかでそう思ったものである。

それまでよく見かけた労働運動のグラビアは、スト・デモ・コブシばかりが多かった。それでは、労働者個人が見えにくいのだ。当時、農民もよく撮っていたが、農民の場合だと、家庭と仕事が一体である。だから、口先でなんと言おうと田畑や家族との触れあいを見れば、その人がなんとなくわかってくる。労働者は、そうはいかない。格好よく言ったり振るまったりに、案外まどわされてしまいかねない。そこで、なるべく私生活の領域をも撮るようにした。新婚の金子夫妻がほっぺたをくっつけているという争議写真が、かくして出来あがる。

もっとも、金子さんの結婚式は、前もって取材を申し込んだところ拒否された。解雇直後で、世話役がひどく神経をとがらせていたのだった。

奥さんが妊娠中に夫婦そろって首を切られた東田さんはじめ、幾人ものお宅にズカズカと無礼にも入りこんだものだ。こうして、「沖電気争議支援中央共闘会議」が結成されるころまで、争議団を諸側面から撮りつづけた。争議団にとって夢中であったであろう、前半の四年間強の時期である。

あらためて密着(ベタ)を見直してみて気づいた。三年めまでは笑っていてもどこか顔が緊張しているのであるが、八一年もすぎるとそれが薄れてきている。いっぽう、表情の清潔さは同じであった。人間の誇りというものを感じさせる。何故か、「ああ、勝ってあたりまえだなあ」との思いがつきあげてきた。

つきあいの続いた理由として、多くの争議団員の″だらしなさ″(誤解されると困るのだが)がある。僕は、いわゆる労働運動の闘士タイプというのが、あまり好きではない。その点、彼らは、「闘士」とはかけはなれていた人が多かったので気楽だった。解雇撤回闘争といえば、ふつう相当な決意と覚悟をもって臨む。また、労働運動の経験もある人というのが通り相場だ。ところが、沖電気争議団の場合、一部の人はともかく、どうもそうしたこととは無縁のまま争議に入った人もいたようだ。区労協の何たるかを知らないのはともかく、当時の総評と同盟の違いも知らない人がいたのにはびっくりした。だが、世間一般では、そのことはさほど驚くことでもないだろう。やる気をなくして寮でフテ寝していても、こっぴどく批判をされたというのも聞かない。大企業のカゴの鳥だったのが解き放たれて、争議を楽しんじゃった、といったら言い過ぎだろうか。撮影する側も、いっしょに楽しんじゃった、という面があるのである。労働界の再編が動き続けた中で、″だらしなさ″まで率いた指導部や支援の労組幹部の御苦労は、察するに余りある。

沖電気争議を記録したのは、僕の誇りである。この取材で、マネーゲーム狂奔に象徴される世情を見すえるひとつの足場を、得たように思う。これからも、いつでもどこでも、胸をはって争議団の人と会えるような生き方をしてゆこうと思っている。

生き方が試されて―

森住 卓

沖電気争議団は私にとって何だったのかと問われたとき私はこう答える。

人間らしく生きたいと願い、それをはばむ者へ敢然と挑む姿にあこがれてしまったからだ。

それは彼ら争議団の人々がなぜ八年間もたたかい続けたのか、という問いかけの答とも共通するものかもしれない。

今の世の中、安易に生きようと思えばいくらだって道はある。

だが、彼らの選んだ道は一番厳しい道を選んだのではないか。

社会の不条理に、不正に声を上げ、それにいどむ事がどんなにむずかしい事か。でも、それがもっとも人間らしい生き方につながるのではないか。

だからこそ、沖電気争議団のたたかいは全国に共感をひろげ、彼らの生き方を共有する人々が増え続けたのではないのだろうか。

私もその一人だ。

私のかかわりは争議の始まった七八年十一月からだ。当時、民主青年新聞のカメラマンとして取材に入った。解雇というものの経験がないだけにさっぱりわからなかった。

ただ、不当な理由(それもほとんど理由にもならないデタラメさ)で工場の外に放り出された人々への同情と非情な会社への怒りから夢中でシャッターを押し続けた。二十八歳の時だった。

当時は今よりもずっと青年だったからより正義感も強く、多感な時代であった。

争議の当初、就労闘争は「解雇は不当だから工場に入れろ」と門前で守衛やかり出された職制と一戦交えて終るという、状況だった。

ある朝、仲間が引き上げたあと、一人じっと金網ごしに工場の中を見つめる青年労働者の後姿があった。荒木君だった。

彼らがどんなに無念だったか。「きっともどって来るからな」と無言の背中は語っているようだった。

以来、シャッターを押すこと、争議団の人々の姿を記録する事が私のできる彼らへの連帯と支援の行動と思いつづけた。

争議が始まって五年、私の子供が三歳になった頃から、争議団の集会での子供たちの姿が目につきだした。

以前から見かけた光景だったが気にもとめていなかった。

一人の子をもつ親としての目で沖電気争議を見るようになったのかも知れない。

壇上で自由奔放に走りまわる子供たち。ねむい目をこすりながら母親の手を握ってデモ行進をする子供たち。私は、沖電気という資本の悪らつさ、非情さを感じざるを得なかった。

争議団の事務所はたたかいのきびしさとは逆に、いつも明るく、笑顔がたえなかった。とても暖い雰囲気を持っていた。

一人ひとりの笑顔は魅力的だった。その笑顔と〝どっこい生きている〟ことが会社にとって大きな脅威だったのかも知れない。

それがあったからこそ、八年間もたたかい続けられたし、私が撮り続けられたのだと思う。

争議が解決しそうだという話を聞いたとき今まで撮影したフィルムを見直してみた。

五百本近いフィルムは私の沖電気争議団とのかかわりのすべてだ。

沖電気争議団の記録の一部であると同時に私の生き方を記録することにもなった。

フィルムを見終って、不十分さがたくさん目についた。それはそのまま私自身の生き方にも返ってくる事だった。

その不十分さを気づかせてくれたのは沖電気争議団の一人ひとりの生き方だった。

この写真集発行を機によりいっそう人間らしく生きる事とはなにか、このつきない疑問を解決するために努力したい。

支援闘いのぬり

メインバンクの富士銀行への抗議（東京・丸の内）。［1984・7M］

匿名の定期便

毎月二千円を匿名で
送りつづけてくれた
愛知県の主婦。
沖縄のサーターアンダギー。
静岡のメロン。
福島のサクランボ。
北海道のサケ。
全国から、
支援物資が届けられた。
その度に、事務所は、
歓声に湧いた。
ときには、争奪戦にやぶれ、
しょんぼりする
人もいたり…。
街頭宣伝をすると、
必らずカンパが寄せら
れる魅力ある争議団
でもあった。

沖電気本社前。―［1984・5M］

「ゆるすな！
指名解雇」の声

沖電気本社前抗議行動
九十八回。
工場前宣伝行動
四百六回。
支援団体数
六千百三十九団体。
配ったビラ
八百五十種以上、
千四百五十万枚
（一日平均　約五千枚）
労働争議で
最大の二万四千人。
沖電気―電機の職場―
地域―全国を結んで、
一歩、一歩沖電気
を追いつめた。

本社前の座りこみ。指名解雇から満三年。―
［1981・11・21F］

沖電気本社前。―［1979・1M］

「たくさんたべて沖の会社にこけるな」
とトラック一台分の野菜が届けられた。
「1980.11.1F」

雇を
撤よ!

沖電気争議団の旗を高くかかげて…。―［1981・3・19F］

ボイコット
ストを回避せよ!

本社前につまれた指名解雇撤回の署名の山。［1985・2・5M］

東京・港区支援共闘会議。［1985・6M］

見ず知らずの多くの人々から激励の手紙やカンパが寄せられた。
[1978・12M]

集会では、いつも募金がよせられた。日比谷野外音楽堂での集会で。―［1980・5・29F］

「これ私に似合うかしら」顔も知らない多くの人々から支援がよせられた。―［1984・2M］

解雇直後、続々と励ましの手紙がよせられた。―［1978・11・24F］

本庄支部のプレハブ事務所。埼玉県の支援する人々が建ててくれた。―［1979・5F］

三年めには日比谷野外音楽堂をうめつくすようになった。―
［1981・10・23F］

品川工場前。―［1978・12M］

東京・山手線一周宣伝行動。［1984・11・30M］

沖電気
不当解
撤回
沖電気の首切り

本社前にハリボテをくり出しての抗議行動。―［1979・5F］

日本のうたごえ祭典で、指名解雇の不当を訴える。［1978・12・3東京・浅草M］

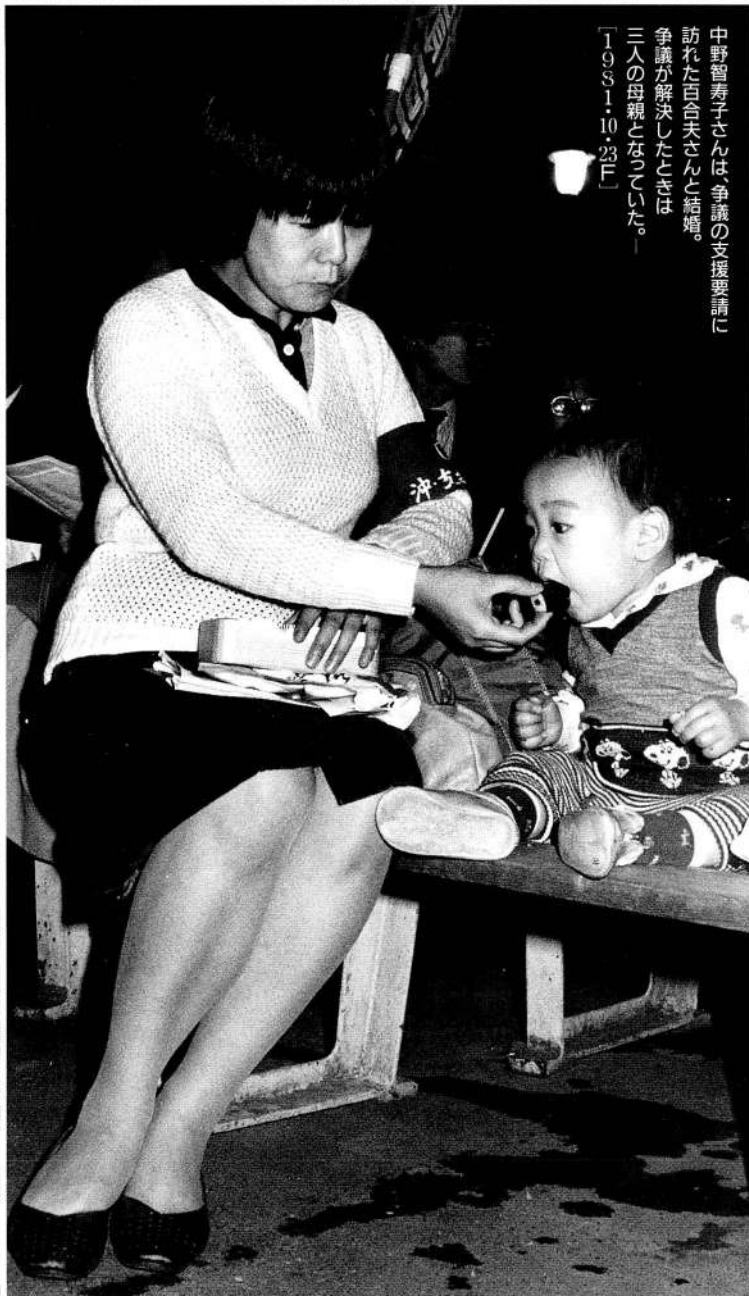
職場で支援していた浅利さん（写真）と中山さんは、休暇をとって争議団の裁判を傍聴したのを理由に三年間、仕事をとりあげられた。―［1981・10・23F］

高崎支部の五人組。―［1980・2・1F］

第50回中央メーデーの隊列で。［1979・5・1M］

裁判は、総勢九十一名の弁護団によってすすめられた。［1981・10F］

芝浦工場前で集会。［1985・4・5］



中野智寿子さんは、争議の支援要請に訪れた百合夫さんと結婚。争議が解決したときは三人の母親となっていた。［1981・10・23F］

争議から足かけ五年め、中央共闘会議が結成された。［1982・11・30F］

座りこみをする故・伊藤善正さん。「節をまげたくない。最後までがんばる」と。84年8月3日、64歳で死亡。―［1981・11・21F］

伊藤善正さんを偲ぶ会―［1984・9M］

沖電気争議と二人の写真家

一九七八年十一月二十一日。寒い冬の朝。沖電気の工場の前で「沖電気は指名解雇を撤回し、ただちに就労させろ」と、職制のバリケードに対峙してシュプレヒコールを叫び続ける被解雇者。この日から、沖電気争議の勝利の日まで、百ヵ月間も、自費で写真を撮り続けてくれた藤田庄市さん、森住卓さん。ありがとう。

二人で撮った二万五千枚の写真の一枚、一枚は、争議団の生活と闘いの絵に見える。が実は、二人のカメラマンの人間としての良心が、写し出されているように思う。沖電気争議に対するおもいと、団員に対する愛情があったからだと思う。

「イガグリ頭のお兄ちゃん」と争議団から呼ばれた藤田庄市さんは、夏になればスイカをかかえ、「オイ食べな」と沖電気争議団の事務所へくる。そして、だれとでもきさくに話をする。藤田さんが撮った妊娠中の女子団員の写真は、非道な指名解雇を世の中に知らせると同時に、支援を集める大きな武器になった。争議団のすべてを撮ると言う藤田さんは、秋田県・わらび座での交流会では、いっしょに風呂まで入り、私たちの姿を撮るなど、その迫力はすごかった。

森住卓さんは、自分と同年齢の人が、子育てをしながら闘っている姿に共感したのか、争議団の青年や、子どもの写真が多い。特に、雪の日、沖電気品川工場の前に立っている子ども二人と一緒の母親の姿は、争議のきびしさが表われていると、評判を得た。また、地方オルグへも同行し、争議を自らも体験し、それを写真と文章で発表した。争議団の家庭へもよく出かけ、それらをまとめ、いろいろな「写真展」へも出品し、「ゆるすな指名解雇！」を訴えつづけた。

「どの家庭へ取材に行っても暖かく迎えてくれた。決まったように、すきやきだったよ」と二人、沖電気争議団へ毎月カンパを寄せ、物品の差し入れをしながら、争議団を励まし続けてくれた二人。この写真集が、沖電気争議につながっているすべての人たちを、今後も励ましつづけてくれることでしょう。働く者が、平和で安心してくらせるように…と。

一九八七年六月

松本謙司
（沖電気争議団）

勝利

勝利は、新しい闘いのはじまり。

「七十一人の指名解雇撤回、三十五人の復職、解決金十二億九千万円」

和解が成立し、沖電気指名解雇撤回闘争は終了した。

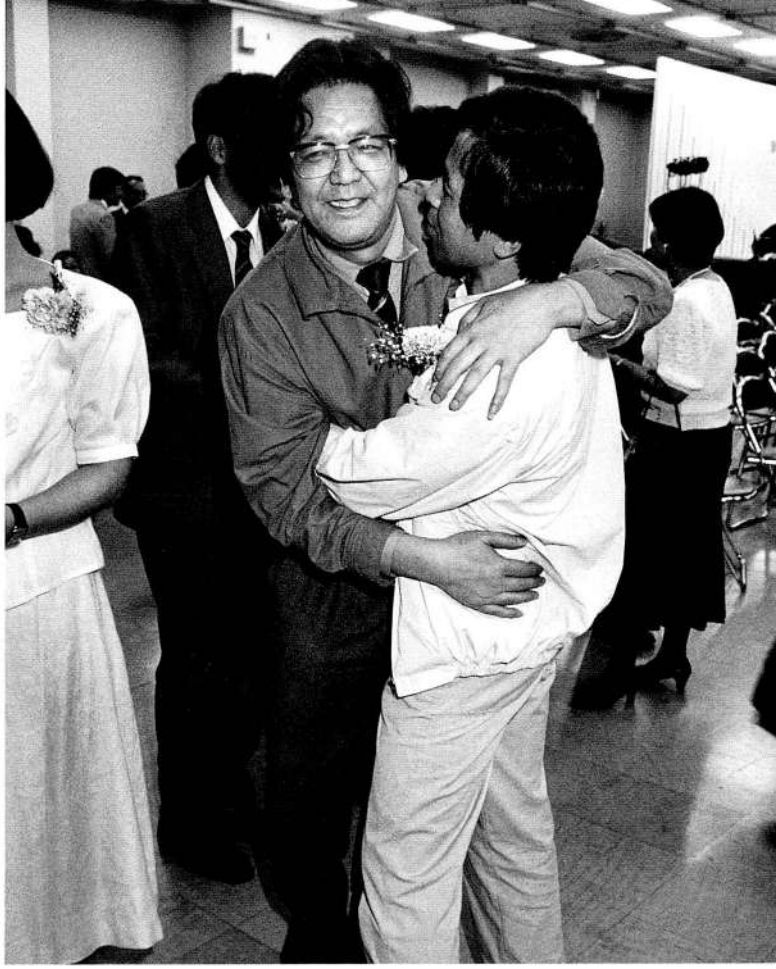
「大きな勝利です。暗い夜空に輝やく星を見つけた喜びです。希望をありがとう。

団結して闘えば正義は必らず勝つと教えられました。ありがとう」支援者の声。

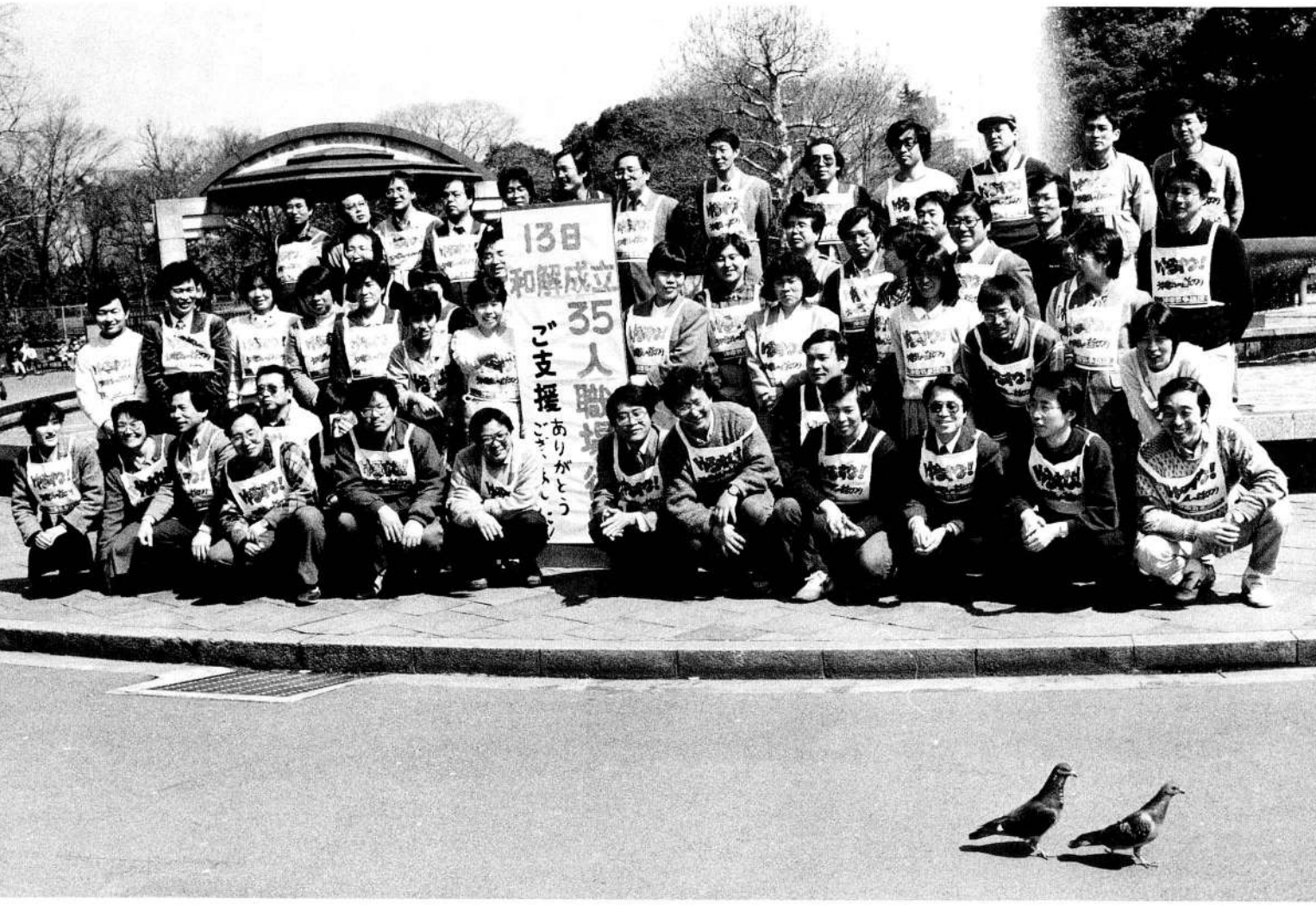
「争議は、楽しくて勉強になりました」沖電気争議団員の声。

[1987.3.16 M]

一九八七年五月二十五日
東京・流通センター



熱きおもい…で



[1987・3・16M]

編集を終えて

中村梧郎

藤田君・森住君のふたりから、撮りつづけた写真を「一冊にまとめたい」という相談があったのは、沖電気争議が解決して間もなくのことであった。私は一も二もなくその〝編集まとめ役〟を承諾した。

執念というものがドキュメンタリー写真家に不可欠の要素だとすれば、これはふたりとも人一倍である。そのうえ主題は〝日本を震憾させた〟沖電気争議。こちらも写真家であるが故に、キャラクターの異なるふたりの、一枚一枚の写真に目を通すのは楽しみな作業であった。セレクションを進めながら、二〇年も前に私自身がある争議団の一員であったことの記憶が、画面からまざまざと蘇えってきたりもし、鳥肌のたつような思いもさせられたのであった。

「沖電気と比べるとそんな争議団イメージはもう古いよ」などと、思いもよらなかったアナクロぶりをからかわれつつ、それにしても深いところで日本の現代史とかかわっていた沖電気闘争というものの写真記録を、こうして編集し終えることができたのは、役まわりとしては幸せなことであった。頁数の制約や意味あいのダブリから、泣く泣くボツにした写真にも良いものがあったことをまずはつけ加えておきたい。

人間の尊厳をふみにじって攻撃を加え、隷属を強要するのは侵略戦争の論理でもある。しかしベトナムはすでに勝ち、沖電気の争議団はこのキナ臭い時代のただ中で勝った。蟻は象を斃せる。このロジックの巨大さは、言葉であらわしきれはしない。長い闘いの歳月であったというのに人間の、働く者の力というものを、優れた写真に記録し、表現し遂げた藤田君・森住君のふたりに、心からその労をたたえてあげたいと思う。争議の当事者ではなくとも、ふたり共に、今はやはり〝たたかってよかった〟という心境であるにちがいない。これほどに全面的で奥深い記録を擁した労働争議写真集は、あとにも先にも出ないのではないかとさえ思う。確実な歴史の証言である。

争議団への私からの敬意は、あえて言うまでもない。「闘いぬいた人びと」は、私の胸の中ではすでに神格化されてしまってもいるからだ。

一九八七・六・三

（インドシナ取材の準備をしつつ）

藤田庄市(ふじた　しょういち)

1947年、東京生まれ。

大正大学文学部哲学科

(宗教学専攻)卒。

日本写真家 協会会員。

フリーライター。

『施設にくらしをきずく』

(共著・全障研出版部)

森住 卓(もりずみ たかし)

1951年、神奈川県厚木市に生れる。

民主青年新聞写真部を経て現在フリー。

「世界」「中央公論」「文化評論」などの月刊誌に三宅島基地化反対闘争や日米合同演習などのドキュメンタリーフォトを発表。

日本リアリズム写真集団常任理事。

日本写真家協会会員。

この写真集を出すにあたって、中山森夫さんをはじめ、松本謙司さんや争議団の皆さんのご配慮にとても感謝しています。

また、編集では中村梧郎さん、ありがとうございました。

いろいろ発行の手はずをして下さった日本電波ニュース社の藤井利巳さん、感謝申しあげます。

1987年6月

藤田庄市/森住 卓

撮影者の表示は本文キャプションに F(藤田)、M(森住)と記してあります

藤田庄市・森住 卓写真集『たたかってよかった』

沖電気指名解雇撤回闘争の記録

1987年6月20日　限定2,000部発行

定価3,000円

著者/藤田庄市/森住 卓

編集/中村梧郎

装本/粉川道博

印刷/株式会社 太平印刷社

発行所/日本電波ニュース社

東京都港区赤坂2-10-8信和ビル7階

〒107　TEL 03(584)7441

●乱丁・落丁本はおとりかえいたします。